
仮面

有沢翔治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面

【Nコード】

N8189R

【作者名】

有沢翔治

【あらすじ】

哲夫は美術展の帰りに不思議な体験をする。地下では縁日が開かれ、仮面が売られていたのである。突き動かされるように仮面を買ったが……（『TEN88』所収）

「大人は千二百円、中学生は無料となります」

極めて事務的な笑顔を張りつけて美術館の若い受付嬢は言う。絵をいたわるため、アーチを隔てたギャラリーの照明は薄暗い。淡い色使いで「アメデオ・モディリアーニ展——顔にこだわった画家」と書かれている。

最初はアフリカの仮面が展示しており、それが中学生の哲夫の目には余計不気味に映った。哲夫は痩せているが、背も低く、肝っ玉も小さいのである。怖くなってロビーを見ると、柔らかそうなソファが置いてあって、その隣には自動販売機でホットドリンクが売られている。

哲夫は大袈裟に欠伸をして母親、洋子をチラリと見て聞こえよがしに、

「一人でこられるって言ったのに」

と睨み付けた。矛先を洋子に向けて、恐怖を紛らわそうとしたのである。そんな都合のいい自分に少なからず嫌気が差す。そして美術の課題で退屈な絵を見させられるハメになって、苛ついていたのもあった。

彼女はそんな思いも知るよしもなく、茶色いハンドバッグから財布を取り出した。

「さ、行くわよ」

どこことなく気取った声で彼女は哲夫に声をかけて、スタスタと洋子はギャラリーへと進んでいった。それを追いかけるようにして、哲夫は足を踏み入れたのだった。

宿題には関係ないと言い聞かせながら早足でアフリカの仮面の展示室を抜ける。次の部屋のアーチが見えホッとした。絵の中では首や顔の長い女性たちが哲夫を見つめていた。

「落書きみたい。こんな絵なら僕でも描けそうだ」

と哲夫は呟く。洋子はそれを聞き、たしなめた。

「バカねえ、あんたには絵の素晴らしさが解ってない」

「そついうお母さんだって。解ってるの？」

と心に土足で踏み込まれたような気分になって、思わず反論する。

「静かにしなさい」

自分から言い始めたんだろう。不満げにそつ心の中で呟いた。

「それと線を越えてるわよ。見えないんだつたら眼鏡を掛けなさいつて言ってるでしょ」

洋子に言われ足許を見ると、確かに白線を越えている。見えなくて、知らず知らずのうちに絵に近づいていったのである。しかし哲夫は眼鏡を掛けずに、半歩下がった。眼鏡を掛けると歪んで見えるので余り好きにはなれないのだ。洋子に訴えてもすぐに慣れる、と言われて取り合ってもらえなかった。

気まずい沈黙の中、進むに従って彼女たちの顔から魂が抜けていくのが感じられる。そして最後には「自画像」の顔が哲夫をぼんやりと見ていた。生きているのか死んでいるのかさえも解らない。穏やかな笑みを浮かべ、何かを悟ったような表情である。頬が痩せこけているにもかかわらず、赤みが差し、かえって健康そうである。

一巡りすると洋子は売店に足を踏み入れる。今日飾られていた絵の他にも色々な絵のポストカードやクリアファイルが並べられていた。売り子は営業用の笑顔を張りつけながら、客たちと接していた。まるで感情のないロボットのようである。

洋子はポストカードの品定めを始めた。どうせ近所のオバさんたちに教養人の振りをして知識をひけらかしたいんだろう……。そんなことを考えて哲夫はうんざりしてしまう。おまけに買い物は悩んで結局、決まって買うのは百五十円のポストカード一枚だけなのである。

その間、哲夫は退屈しのぎに辺りを見回した。ポスターによると次はマグリットやダリがくるらしい。また宿題になるのかな、とうんざりしながら見る。その間を見ると、地下へ階段が延びている気

が付いた。おかしいぞ、と彼は美術館の地図を思い出す。これより地下はないはずである。職員の休憩室だろうか？ そう思ったが、「スタッフルーム」という名前でそれは書かれていた。

だとするとあの下には何があるんだろう？ 恐怖心とともに好奇心もそえられる。それと同時にここでないなくなったりしたら心配するんじゃないか？ という思いがよぎって横目でチラリと窺った。しばらく見ていると待っているのがバカバカしく思えてきて、階段に忍び足で近づいたのだった。

「やっと灯りが見えた」

薄暗くて長いらせん階段を下りていくに連れて、そう呟いた。ここはコンサートに備えて練習する施設かな……、太鼓の音が聞こえてきてそう首を傾げる。しかし、それも進んでいくと違うと解ってきた。太鼓の音の方へ誰かに操られているように歩くが、決して不快な気分ではなかった。

空を仰ぐと今まで登ってきた階段が天まで続いている。それになんだかふわふわして身体が浮いているようで、夢の中にでもいるような気分になる。辺りが薄暗いのもその原因の一つかもしれない、と哲夫は思った。

「ここはどこだ？」

と歩きながら哲夫は辺りを見回すと池があつて、そのほとりには一輪のユリが咲いているのが見える。また、木の穴には蛇が出たり入ったりしていた。その上でいかつい男が枝を切っているほかは大草原が広がっていた。その風景を見ていると言いやうのない不安に襲われ、足を早める。やがて鳥居をくぐると縁日が開かれていて、祭り囃子はそこから聞こえるのだった。

石畳沿いには灯籠がぼんやりと灯っている。その奥の色んな屋台を眺めているどこかで見たような気がして記憶を辿ろうとするが、糸はふつとりと切れたように一向に思い出せる気配はない。しばらく考えているとテレビの中だったかもしれない、あるいは夢だった

のかもしれないなどと記憶が曖昧になっていた。

「どこでもいいや」

そのうちに彼は諦めて、奥まで走っていったのである。

両側に並んでいる屋台を交互に眺めながら哲夫は道を進んでいく。傍らでは髭が伸び放題で髪がボサボサの老人たちが盤を挟んで賭け事に興じていた。

ここは何だろうとテントを張っただけの店を見つけ、入ってみる。ゴムプールが置いてあってその横には「金魚すくい 一回二百円」と段ボールの看板が掛かっていた。茶髪の若い女性店員が愛想笑いを浮かべている。ランタンがその横に置かれていて、その光で女性の影が気味悪く揺らめいて。

ゴムプールの前には二人の男が座っていた。しかしポイとカップは傍らに置かれ、雑談をしている。まだ準備をしてるんだらうと考えて、

「すみません」

と慌てて出ていこうとする。それを見て店員は、

「やってく？」

と呼び止める。戸惑いながらも哲夫は頷く財布からお金を取り出して渡した。ポイとカップを受け取ると、ゴムプールの前に腰を下ろして、腕まくりをする。しかし肝心の金魚が一匹も見えないのだ。哲夫は腹を立てて、

「お姉さん、どこに金魚がいるの？」

「じつと見てて」

「見たっていないものは……」

半信半疑でジッと水面を見つめる。それを見ていた隣の男性が、
「あんちゃん、それじゃダメだよ。もっと深いところを見なきゃ」

言われるがままにプールの底を見つめる。すると金魚の悠々と泳ぐ姿が段々と浮かび上がってきた。哲夫はポイを荒々しく入れて、カップに放り込む。覗くと金魚は飛びはねていた。それを見て嬉し

くなるが、ずっと溶けるようになってしまつ。一瞬ぎよつとしたものの、カップの底を眺めればまた見えてくるだろうと上から覗き込む。しかし一向に現われる気配もない。

別の男が仏頂面で、

「あんなやり方じゃ逃げられる。すぐえれば運がいいっていう気持ちで臨まないと」

「もう一回」

と言うと、店員は首を振りながら、慇懃な物腰で、

「申し訳ございません。一回だけと約束事で決まっております」
しかし、その態度には哲夫をはね付けるような冷たさが滲み出ていた。哲夫は諦めきれずにプールの奥底を覗き込むと、相変わらず金魚が浮かび上がっては水の中へと溶けていった。

「一回だけなんて聞いてないぞ」

と悪態を吐きながら進んでいくと、玩具屋を見つけた。凹面鏡や凸面鏡が置かれていて歪んだ景色を映し出していた。店主はどこだろう、と辺りを見る。服だけがあるからトイレにでも行っているんだろう、と心の中で呟いた。その脇には棚に仮面が並べられていて、興味をそえられる。

安っぽいプラスチックの面から高級な仮面まで一列に正面を向いている。見ているうちに手に取って眺めたくなつたが、商品だから触っちゃいけない、と自分に言い聞かせる。その一方で誰も見てはいない、と思うと触りたい誘惑を断ち切れないのだった。店主が帰ってきたら元に戻しておけばいいじゃないかと考えて、哲夫は手に取ってしげしげと眺めた。笑っている表情が彫られていて、ゴワゴワしている。何の気なしに裏を返してみて、

「あつ」

と声を挙げた。そこには父親、母親の洋子、担任の教師、友達の顔などが歪んで描かれていたのである。しばらく啞然として眺めていると、

「いらつしゃい」

と声がしてその方向を見る。さっきまでは暗くて店主の服しか見えていなかったと気が付いた。改めて見てみると顔の輪郭がおぼろげに浮かび上がってきたが顔までは解らない。本を読んでいて、俯いている。

「あ、あのう。ご、ごめんなさい」

上目遣いに店主を見る。彼は目を上げずぶつきら棒に、

「気にすることはない」

「あ、あのう……このお面は？」

店主は急に立ち上がると、足音もなく哲夫に近づいて囁いた。

「つけないさい」

そう言うとは仮面を棚から外して手渡す。戸惑いながらも受け取る
と言い知れない安らぎを感じて、顔にはめてみた。始めこそ仮面を
被っている違和感はあるが、すぐにそれも消えて自分の顔のよう
に感じ始めたのだった。

哲夫は財布を取り出してお金を支払う。少し高い買い物だったが、
この不思議な仮面を買えた喜びで心は一杯だった。

「……夫、哲夫」

洋子に身体を揺さぶられて、哲夫は目を覚ます。どうやらロビー
のソファで居眠りをしてしまったみたいだな、とぼんやりとした
頭で考えた。

「そうだな。あんなことは常識じゃありえない」

そう自嘲気味に笑うと、大きく伸びをする。その様子を傍らで見
ていた洋子はきよとした顔でどうしたのと尋ねた。今見た夢の
話をしようかとチラツと考えたが、バカにされるに決まっている
と思い直して、

「ううん。何でもない」

と答えたのはいいものの顔に違和感を覚えて仕方がない。何かゴワ
ゴワした厚い仮面を付けているような感じは息苦しさすら覚える。

しかしその反面、決して気持ち悪いのではなく、心地のよさすら感じていた。その一方でこのままではいけない、と心のどこかで聞こえてくるのだった。

鏡を見れば何か解るかもしれない。そう思って、

「ごめん。ちよつとトイレ」

と洋子に言つと、彼女は眉を潜めて、

「もう、早く帰つておいでよ」

自分の買ひ物は長いのに……、と心の中で呟いたが、またヒステリーでも起こされたら溜まったもんじゃない！ それに顔のこの感覚がどこからくるのかを知りたくて仕方なかった。生返事をしてトイレに駆け込んだのである。

洗面台には哲夫の顔が縦長になって映り込んでいた。鏡の中を覗くと、

「やっぱり仮面が張りついている」

と呟くとひつぺ返す。ベリベリと剥がれて、手許には薄いマスクが残った。痛みを伴うと思って目をつむったが、思っていたより簡単に取れて安心する。余分なものが取れて気持ちがよくさえもあった。何だっただらう、としげしげと眺める。

内側には怖がっている顔が刻まれていた。夢の中で買ったものは寂しそうな表情の仮面だったはずである……。ひっくり返してみる。と笑みを浮かべている表情だ。これは変わっていない。

「あれっ？ 気のせいかなあ」

とよく見る。内側に描かれている洋子の絵が少しだけ大きくなっているような気がしたのだ。

訝つてしていると仮面を売っていた店主が入ってきて、足音もなく哲夫の傍らまできた。声を上げそうになったが、トイレくらい行くだろうと思ひ直す。噎れた声で鏡越しに哲夫を見据え、ゴミ箱に仮面を捨てようとする哲夫に向かって、

「本当に捨てるんだな。生きにくくなるぞ」

「どうということ？」

振り向くと老人の姿はなく、風が通り抜けていった。白いマスクは顔から外すとみるみるうちになくなってしまう。まるで手の中でアイスクリームが溶けていくようだった。生きにくくなる、という老人の言葉を思い起こし、慌てて仮面を付け直すところ呟いた。

「また息苦しくなったら外せばいいや」

十字路を曲がって、哲夫は細い路地へと入った。たそがれ時で先を行く洋子の後ろ姿や、通りかかる人の顔はぼんやりとしか見えな

い。

両脇に並ぶ建売住宅はどれも同じ形をしている。ある家の前ではガレージに車を停めているところだった。どんな人だろうと哲夫は見つめると、なんと言うことない、ネズミ色の背広を着たサラリーマンで少しがっかりした。

「何やってるの？ 置いてくわよ」

買物袋を提げた洋子に呼ばれ、速足で追いかけると茶色い家が見えてくる。いかつい体格の父親、広史が庭で剪定をしているのが影絵のように映し出されていた。ここはどんな人が住んでるんだったっけ……。隣家の前を通りながら哲夫は思い出そうとするが、声は思い出しても顔までは思い出せなかった。まるで顔だけが切りとられてしまった絵のようだ。

そう言えば話したことすらなかったのではないかと考えていると、

「おかえり」

と広史が声を掛ける。玄関に入ると、洋子はヒールの紐をほどきながら、

「ああ疲れた」

「お疲れさん、早く飯にしてくれ」

「ちよつと待ってよ」

無神経な物言いに力チンとする。

「疲れてるって言ったでしょう！ それに着替えもまだなのよ」

うんざりして広史が、

「一休みしてからでいいから」

「作るわよ、作ればいいんでしょ！」

洋子は自室のドアを荒々しく開けると冷たい空気が流れ込んでくる。

中でやればいいのにと哲夫は呆れながら、リビングに入った。椅子が四角いテーブルを囲んでいて、隅に置かれたテレビの前にはホットカーペットが敷かれていた。棚の上の金魚鉢に目を移すと金魚が涼しそうに泳いでいる。カーペットの上に胡坐を掻くとテレビのリモコンに手を伸ばす。大して興味のないアニメがやっていた。

着替えを終えて、洋子は奥の台所に姿を消すと、悪態だけが聞こえてくる。いつまでムクれてるんだと彼女に不満を言いたくなつたが飲み込んだ。火に油を注ぎかねないし、「あんたは黙ってなさい！」とすごい剣幕で怒鳴り散らされるのが関の山だ、と考えたのである。彼女の声を聞かないようにテレビのボリウムを上げた。

つまらずに窓にぼんやりと目を向けると、哲夫の不機嫌そうな顔が鏡のように映し出されている。それを見てあつと声を挙げそうになる。仮面が剥げそうになっているのだ。いつそのこと剥がしてしまおうか、と考えた。

ふっと誰かが横にいるのを感じて、

「誰？」

と振り向くとまたあの店主が座っている。何でこんなところに！と無気味に思っている哲夫をよそに、

「外すのか？」

と囁いた。そう言われると外してはいけないような気になる。しかし、

「哲夫！ もっと小さく！」

と言う声で我に返り、辺りを見回す。しかし店主はどこにもいない。気のせいだと風が通りすぎるのを感じて、肩を竦めるとボリウムを落とした。それにしてもいきなり「早く飯にしてくれ」はないだろう、と広史に軽い怒りを覚える。洋子を庇うつもりはないが、

彼女が怒るのも当前だとも思った。しかし哲夫がいくら言ったところで信じてもらえないのは目に見えている。そう思い始めると心に穴が空いてしまったかのように寂しくなった。

やがてむっつりとした顔でカレーライスとオニオンスライスが運ばれてくる。どうせカレーで余ったものをオニオンスライスにしたのだと哲夫は考えた。しかしここは大人しくしておいた方が面倒なことにならない。そう考えて、哲夫は立ち上がって席に着いた。そして小さく、

「いただきます」

カレーに添えられたラッキョウが二つ、顔のように哲夫を眺めていた。

翌朝、いつものように哲夫の横を高校生も自転車に乗って風のように通りすぎていった。危ないじゃないか、と顔をしかめる。前を歩いているサラリーマンはひらりと身をかわして何事もなかったかのように歩き始めた。

後ろからポンと肩を叩かれて、振り向く。笑顔でクラスメイトの稔が立っているのを見て、

「おはよ」

と短く返した。だらしくワイシャツを外に出しているのを見て相変わらずだな、と苦笑した。しばらくゲームやアニメの話題などをしていると、白い校舎が見えてくる。角を曲がると運動部の早朝練習の声が聞こえてきた。校門に立つ生活指導の教師の姿が見え、稔と顔を見合わせる。できるだけ目を合わせず、小声で挨拶した。

「おはよ、お前、シャツを入れる」

白いジャージを着た教師はぞんざいに言う。稔はそれを無視し、通りすぎようとした。教師は彼の手を掴んで、低い声で、

「待て、シャツを入れるって言ってるだろ」

「先生、入れるからさ。離してよ。それともホモなの？」

「いいから黙って入れろ」

ニヤニヤと笑う稔を哲夫はヒヤヒヤしながら、チラリと様子を窺う。すると教師も仮面をつけているのが解った。しかもそれは幾重にも重なっていて、地層のようになっていた。初めのうちは驚いていた哲夫だったが次第に受け入れ始めていた。

稔がシャツを入れるのを見て、教師は頷く。

「よし、行ってもいい」

離れてしまうと稔は聞こえよがしに、

「鬱陶しいな、うるさいんだよ」

と言つて哲夫に向き直り、

「ああスツキリした。さ、行こうぜ。……どうした？」

「仮面が見えたんだけど……」

「仮面？」

「い、いや、何でもない」

「何言ってるんだ？俺らは仮面をつけないと学校に入れないじゃないか。女子は割と早く仮面を買うけどな」

美術館へは仮面を買わせるために行かせたのかと納得する。詳しく教えて欲しかったが、それよりも早く、女子の誰が可愛いとか詳しく話し始めた。どこから情報を仕入れてくるんだと呆れ半分、成心半分で聞き流す。

話を聞いているうちに、心のどこかに満たされない何か広がっていく。しかし寂しさとも虚しさともつかない気持ちだ。何だろうかと考えながら教室のドアを開ける。教卓の上にはクラス名簿が乗っている。

仮面を外したら何か解るかもしれない……と、顔を引っ張る。しかしもう本当の顔のようにぴったりとくっついていた。無理に剥がそうとすると肌を引っ張っているようで痛みを伴う。

「何やってるんだ？」

と不思議そうに哲夫を見つめる稔をよそに、めくれかけた仮面を触ってみる。何かを失ったような寂しさが込み上げてきて、本当の顔に無性に触りたくなったのだ。触ったと思って、一瞬充たされた

ような気分になった。しかし……、

「あ、あれ！」

と素頓狂な声を上げる。本当の顔は既に消えていて、そこから新しい仮面ができていたのだ。稔が、

「なんだ、素顔があると思っていたのか。素顔があるといつまでも信じてて、夢がありますねえ」

と茶化すように言った。まるでサンタクロースをいつまでも信じている中学生を囃し立てるようである。恥ずかしさの余り頬を紅潮させた。

その時、風が窓から入ってきて、哲夫の頬を撫でる。ふと座席を見るとあの店主が彼の椅子に座って、ニヤツと笑いかけたような気がした。しかし再び見ると消えてしまっている。気のせいだったのだろうと思い直し、

「どうしたんだ？」

「なんでもない。そう、なんでも……」
と笑って言う。

哲夫たちのすぐ横を女子たちが仮面をつけてワイワイ喋りながら通りすぎていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8189r/>

仮面

2011年3月22日00時55分発行